



ロイド・ジョーンズ著、大友りお訳、
『ミスター・ピップ』

Lloyd JONES, trans. Rio OTOMO,

Mister Pip

(282 頁, 白水社, 2009 年 8 月)

ISBN: 9784560090046

(評) 梅正行

Masayuki TOGA

ひとりの作家名を冠する学会の案内が回ってくる
ときなど、その作家の思考の時空間に安住しておこうと
いう誘惑と、そこから出なければならぬという気持ちとの板挟みになること
がある。と、そこまで書くと誇張だが、たとえばディケンズのことを考える
とき、ディケンズという枠を尊重するかしないかで、読者の、そして研究者の姿
勢に違いが出てくることは明らかだ。枠のなかにおさまっていれば、ときに退
屈をおぼえ、枠の外に出すぎれば、出発点がどこだったかわからなくなるこ
ともある。そこで「ディケンズ」と「だれだれ」という具合に別の作家を出して
きてみたり、「ディケンズ」の「なになに」と次々にテーマを立てたりしながら、
とりあえずの破綻を回避する。はてはコーマック・マッカーシー (1937-) の『血
と暴力の国』(『ノー・カントリー』)には一人称と三人称が併用されているが、
これは『荒涼館』と関係があるのではないかと、突飛な連想を働かせたりもする。

しかし、そうした無理をせず、ディケンズにとどまりながらディケンズを出
るという境地にさせてくれるのが、感性豊かな別の作家が一度咀嚼したディケ
ンズに目を向けるというかたちだ。ジョージ・ギッシングやジョージ・オーウ
ェルやアンガス・ウィルソンのディケンズ論がいつまでたっても面白い背景に
はそういう事情があるのだろうし、さらに進んで、イーヴリン・ウォーの『一
握の塵』のディケンズの取り込みようが面白いのは、枠の内と外を同時にと望
む、ないものねだりの発想を、ある程度まで満足させてくれるからだろう。

ここに取り上げる『ミスター・ピップ』は、そのタイトルからして、ディケ
ンズをある程度まで取り込んでいることをすでに暗示している。しかも、舞台
が(ある年代以上の日本の読者の連想としてはあの山本五十六の)ブーゲンビ
ル島、時代が二十世紀九十年代、社会背景に分離独立運動があると聴けば、そ
れらとディケンズが、はたして破綻もせず一冊の本に収まるのかという興味
からだけでも、一夜の読書に値する。われわれは、一方で、ひとりの子供が艱
難辛苦の末、独り立ちしましたというナイーヴな物語に郷愁を感じつつ、他方

で、たとえばトマス・ピンチョンの『ヴァインランド』に登場するある女性の日本体験に妙なリアリティーがあると感じるような不思議な時代に生きているからだ。

『ミスター・ピップ』の粗筋だが、次の一文のことしか言えない。ブーゲンビル島がパプア・ニューギニア政府によって封鎖されていた時期のこと、島に住むただひとりの白人ミスター・ワッツが、この島の子供たちにディケンズの『大いなる遺産』を読んで聞かせる。そこから先について、ミスター・ワッツのひととなり、子供たちの運命、など書評というかたちで語ってしまうと、未読の読者の楽しみをすべてうばってしまうことになるほど結末は深い。事件の意外性とか展開の予測不可能性といったものではなく、ディケンズ理解に新境地をもたらす点がこの作品の優れたところだ。そこで、楽しみをうばうことなく語るには、筋を切り離し、読んだ結果どうであるかということ、やや抽象的に語る必要がある。

まず、そのタイトルからして、この作品はからくり倒れなのではないかという推測は外れる。さらに、内戦という過酷な現実を背景にするのだから何もディケンズというブランドに頼る必要はないのではないかという指摘も外れる。代わって強調されるべきは、作者のディケンズ理解の独自性だ。作者ももちろんディケンズという作家に魅かれ、『大いなる遺産』という作品を愛す。しかし研究者の接近方法とは異なるかたちでディケンズを自分に取り込む。小説を書くというかたちだ。このかたちは『ミスター・ピップ』に登場するある作中人物にも受け継がれ、その人物もディケンズを丸のみにする。そして丸のみしたディケンズとは何であったかということを確認しようと、大人になってから、ちょうど日本の研究者がロンドンに出かけたり、大英図書館に出かけたり、ロチェスターに出かけたりするように、自身に大きな影響をあたえた作家の足跡を確認しようとする。ここにその人物の幼いころの経験にまつわる人物についての過去の探求がからみ、クライマックスに至る全体の五分の四くらいまでの間、あくびをしていた自分を大いに恥じ入る。この作品は最後の五分の一くらいで、迂闊な読者を一気に幾重にも周到に用意された複数の認識へといざなう。現代の現実と古典とを結びつけて成功した作品がそうあるとも思えないが、その古典がディケンズであることがうれしい。

読者諸氏には、すべてを言えぬ筆者のもどかしさを感じ取っていただき、『ミスター・ピップ』の五分の四までを退屈しながら読み、そしてどうか最後の五分の一をいち早く堪能してほしい。